中小路、加賀谷両先生を送る

井 谷 鋼 造

中小路駿逸先生は、一九八七年四月に東洋文化学科に着任された。ご専門は日本文学であり、本学に来られる以前は愛媛大学と大阪大学医療技術短期大学部に勤務されていた。先生のご関心は文学の分野のみに限らず、古代日本人の精神世界全般に関わる文献研究であり、該博な知識を駆使して、本誌にも意欲的な論文を次々に発表された。毎年先生から頂く年賀状には、近況と共にその年の研究目標が書かれていて、学問の道の果てしなさを感じさせられた。先生の日本文学、特に芸能史に関わるご講義は、学生たちにも人気があり、とりわけ授業で先生が芸能を〝実演〟されるのが、その主たる原因であったようである。残念ながら筆者は、中小路先生の〝実演〟を観たことがないので、学生たちからの伝聞によってしか知らないが、さぞや楽しい授業であったのではなかろうか。学内では、入試の関係を含めてお仕事も多く、一九九〇年から二年間は東洋文化学科の主任も務めて頂いた。物静かな中にも毅然たる意志を感じさせる温厚篤実なお人柄で、ゼミを担当された学生たちからも慕われていた。一九九五年度には学内の共同研究「アジアにおける世代観の比較研究――老いと青春の文化史――」の代表者となられ、この共同研究の成果は『アジア、老いの文化史――青春との比較において』と題して一九九七年二月に新泉社より刊行された。一九九七年の春頃から呼吸器系の異状を訴えられ、しばらく休職された後に二〇〇〇年三月末に停年を迎えられた。引き続き四月からは特任教授となられたが、お体の状態が思わしくないため九月末でご退職、十月一日付けで名誉教授の称号が

授与された。今後も中小路先生には、お体のご快復に努められ、ご専門のご研究を継続して頂きたいと思う。

一九九六年九月末にインド史がご専門の近藤治教授が退職された半年後、九七年四月より後任として着任されたのが、加賀谷寛先生である。先生は九六年三月末に停年で退官されるまで、永らく大阪外国語大学でウルドゥー語、現代イラン、パキスタン事情を教えられていた。円満、温和なお人柄で学生たちからも慕われ、熱心な〝加賀谷ファン〟も少なくなかった。学科の教員としては、九八、九九の両年度、学内共同研究「アジア諸地域における文化的アイデンティティの再検討」の代表者として共同研究を主宰された。この共同研究は計一五回の研究発表会を行ない、その成果は二〇〇〇年三月に『他文化を受容するアジア』というタイトルで和泉書院から刊行された。この書物の中で加賀谷先生は総論「アジア社会のアイデンティティ」および「イラン近現代史とアイデンティティ」という二つの論文を書いておられる。また、昨年発行された本誌に、先生は「ラクナウと周辺に、南アジア・イスラームの多様性の一端を求めて」と題する研究ノートを寄稿されている。実は昨年まで筆者は本誌の編集担当であり、昨年は例年になく、原稿の集まりが悪く、年報の刊行が危ぶまれるほどであった。そこで八月も下旬になってから、急遽加賀谷先生に手紙をお送りし、原稿の執筆をお願いしたのであった。幸いにも先生は執筆を快諾され、九月下旬には原稿を提出して下さった。編集の担当者としては、この上なく有り難い原稿であった。原稿の内容は年報の三号をお読み頂ければよいが、永年先生が研究のテーマとされてきた、南アジアの聖者廟崇拝やイスラームのあり方が、現地の調査を踏まえて見事に活写されている。まさに加賀谷先生でなければ誰も書けない、すぐれた紀行文である。残念ながら、先生は二〇〇一年の三月末をもって停年により退職された。四年間というご在職の期間は決して長くはないが、今となっては、ご専門の研究について、先生から、もっとお話を伺っておくべきであったとの後悔を感じるばかりである。両先生の今後のご健勝とご活躍を念じることで、小文の結びとしたい。